

友の会通信

若者たちの見学感想文

しょうけい館を見学頂いた団体来館者の方からは、時折見学感想文が寄せられます。たくさん感想文の中から、ほんの一部をご紹介しますがご紹介させていただきます。

話を聞いて私は、戦争はこんなにもひどかったということに改めて感じる事ができました。特に印象に残ったのは、戦争が終わっても心と体の苦しみが続くというところ。けがをしてしまったら、切断だったり、寝たきりの生活が続いたり、戦争以上に大変なことがあるのだなと思いました。私は教えてもらったことを生かして次世代へと広めていけるよう、頭に入れておきたいです。皆様お体を大切になさってください。(一〇代女性)

戦時中から、戦後までの事柄を細かく丁寧に教えてくれて、とても勉強になりました。銃弾が当たった人が、どのようなけがを負ってその後の生活がどうなるかなど、普段知りたくても知ることもできないことを学んで、改めて戦争はいけないと思いました。この経験を生かして、学校の社会の授業などで、皆に戦時中の悲惨さを伝えられればと思います。(一〇代男性)

戦争を体験も経験もしたことのない私たちは、歴史の授業などで悲惨だということは知っていたつもりだけでも、それだけではいけないと思った。戦後七〇年以上もたった今、戦争を体験していった人が少なくなっているの、「しょうけい館のように形に残してあるものを見に行かなくてはいけないと思った。

友の会通信 第12号

館長就任のご挨拶

三月一日付けをもって、故奥野義章館長の後任として、第四代しょうけい館館長に就任いたしました。

しょうけい館が開館して早くも一五年の月日が経ちましたが、私は館の設立準備段階から検討委員として関与させていただきました。さらに開館後も、運営にかかわる有識者会議のメンバーとして、館の活動を応援してまいりました。

これからは、館長として館の活動がより活発化するよう働きたいと思っています。

戦後七五年余りが経過し、戦争の実体験を語る事ができる方は僅かになってしまいました。それだけに、戦争で傷つき病に倒れた方々の労苦を語り継いでいく活動は、ますます重要になってきています。私も小学校(当時は国民学校)二年生で終戦を迎えました。四国の田舎でも、近くに海軍の飛行場があったため、しばしばグラマン戦闘機の空襲を受け、田んぼの溝に伏せた思い出があります。目の前を機銃弾が跳ね、恐怖に駆られたことが幾度もありました。

戦争のない平和な日本を維持し続けるためにも、さきの大戦で傷つき病に倒れた方々の労苦を語り継ぐ、しょうけい館の活動は、極めて重要なものであります。

私も、微力ではありますが、開館以来の方針を受け継ぎ、誠心誠意努める所存ですので、ご指導ご支援のほど、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

令和三年八月

しょうけい館 館長 原 剛

「知らない」では済まされない問題だと思った。私たちは今を平和に過ごしているが、ただ過ごすのではなくひどい過去を知るべきだと思った。本当に誰もいい思いをしない戦争はなくなればいいと思う。でも必死に生きている人たちはすごいなと思った。とても嫌な思い出があるのにその体験した話をしてくれたことに耳を傾けなくてはいけないと思うし、戦争体験してきた身近な人に話を聞いてみたいとも思った。(一〇代男性)

私の祖父も戦地で負傷しています。戦争を体験した人々は、ひとりひとり悲しいストーリーがあったのだと思います。話をしたり資料を提供してくれる人もいれば、きつとあまり誰にも話せなかった人もいるのだと思います。しかし、現実として体験した方々の「声」のおかげで史料館があり、後世に伝える事ができています。それらを耳にし、目にする事は、自分たちには貴重な体験ではないかと思えます。実際戦争を体験した方はどんどん減ってきているし、それは仕方ない事でもあるので生の声に近づいている私たちが次の世代へ伝えていかなければならないという、責任のようなものも感じました。小さい時から私は当然のように祖父から話を聞いていて、酔った時などはもう耳にタコができるほど聞いていました。あまり普通に祖父が話すので、逆にリアリティがなかったりしたけれど今すぐでなくてもいいからきちんと伝えられるようになりたいと思いました。(一〇代女性)

「友の会通信」は毎年二回の発行を予定しております。

暑さ厳しき折、お健やかに夏を乗り切られますよう、くれぐれもご自愛ください。



発行/しょうけい館
戦傷病者史料館
〒102-0074 東京都千代田区九段南1-5-13
ツカキスクエア九段下
電話 03(3234)7821
FAX 03(3234)7826

夏の企画展 予告

「義足は語るく戦争で足を失った戦傷病者の歩みく」

会期 令和三年七月一日(水)〜九月二日(日) 予定

本展は、戦争によって足に障がいを負い、「立つ」「歩く」という行為を「義足」とともに歩んで来られた五人の戦傷病者の人生と想いを見つめるものです。

近代における義足の開発と改良の歴史を紹介するほか、大隈重信のアメリカ製義足も展示します。

当館ホームページでも展示内容を写真入りで詳しく紹介する予定です。遠方でお越しになれない方は是非ホームページでご覧頂きたいと思えます。



春の企画展 開催報告

「病床からフィールドへ」
スポーツに取り組んだ戦傷病者の軌跡」

会期 令和三年三月一六日（火）～四月二四日（土）
・六月一日（火）～一三日（日）

※緊急事態宣言にともない会期が変更となりました。

本展では、傷病兵とスポーツの歴史を紹介するとともに障がい者スポーツの転換期となった一九六四年東京パラリンピックと出場した傷病兵の活躍を中心に紹介しました。また、直接来館することが難しい状況であるため、ホームページ上で企画展の特設サイトを設け、来館せずとも展示内容を理解できるコンテンツを作成しました。その結果、通常よりも多くの方からアクセスしていただくことができました。

来場者の感想

- ◆一九六四年パラリンピック競技大会のカラー映像が大変貴重でもとも勉強になった。
- ◆パラリンピックという華やかな舞台だけでなく、それまでにあった事実を知ることができた。



展示風景



特設サイト画面

会員の皆様へお知らせ

戦傷病者等の妻の方へ

「戦傷病者等の妻に対する特別給付金」を

ご存じですか

○令和三年四月一日時点で夫が戦傷病者等として増加恩給等を受給している妻の方には、「戦傷病者等の妻に対する特別給付金」が支給されます。

○支給対象予定者の方には、令和三年六月に厚生労働省から請求手続きの案内が送付されていますので、ご確認ください。

○請求窓口は、お住まいの市区町村の援護担当課です。

〈特別給付金に関する問い合わせ先〉

厚生労働省 社会・援護局 援護・業務課 給付係

電話〇三ー五二五三ー一一一
(内線三四二六または四五二一)

企画展の特設ページができました

しょうけい館では、来館することなく企画展をご覧いただけるよう春の企画展（閉会）の特設ページを設けております。外出をお控えなさっている皆様方におかれましても、下記のURLまたはQRコードよりご覧いただけますので是非ご利用ください。

〈企画展の特別サイトはこちら〉

<https://www.shokeikan.go.jp/>

kikaku/byosho-field/



ミニ展示

令和三年一月八日から三月七日まで、ミニ展示「宮本三郎 描かれた傷痍軍人」を開催しました。

宮本三郎の戦争記録画《軍事保護院總裁箱根療養所慰問》（昭和一九年制作、寄贈：箱根病院）を中心に、戦時期における宮本三郎の画業と、描かれている傷痍軍人や、箱根療養所について紹介しました。世田谷美術館所蔵の《飢渴》（昭和一八年制作）もパネル展示し、絵画作品から戦争を考える展示となりました。



展示の様子

ある戦傷病者の八月一五日

今年も、全国戦没者追悼式が行われます。この時期を迎えると、強烈に思い出される人がいます。右脚義足で、毎年欠かさず靖国神社を参拝したあと、当館へ寄り「今年も来たぞ」と元気に挨拶してくれた人です。しかし晩年は、義足のうえ杖を突きながらの来館で、こちらからみても大変さが感じられました。「無理しないでください」というと、「戦友に会いに来てほしいんだ。生きていく以上は、這ってでも来る」と逆に叱られました。「頑張ってください」と言うのが精一杯でした。話し終えて帰る姿は、年輩いた人のそれでしたが、その背中には毅然とした尊厳と風格、そして執念すら感じられました。

来館者の声

◆戦争で負傷した兵隊さん達の壮絶な世界を知り衝撃を受けました。平和な世の中の大切さと負傷した方々への敬意を表したいと思いました。（四〇代男性）

◆戦争での負傷により沢山の方が苦勞なされたという事をもっと皆に知って欲しいし、知りたいと思いました。終戦したとてその方たちの戦争終わっていないのだなと思います。今私たちが平和に暮らしているのもそのような方たちのおかげだと思おうので、もっと平和について考えたいと思います。（三〇代女性）

◆見学によって、様々な境遇におられた方、戦後の苦勞等を知り、傷痍軍人に対する理解を深めることができました。また学ばせていただきました。（四〇代女性）

資料寄贈のお願い

戦傷病者の方の皆様に関する資料（写真、回想記、軍装品、摘出弾、義肢、受傷や恩給に関する文書等）、奥様やご家族に関する資料（日記、写真等）、傷痍軍人会、妻の会に関する資料（会旗、名簿等）をお持ちの方からのご連絡を待ちしております。資料は館で大切に保管し、継承事業に活用させていただきます。

証言映像収録のお願い

証言映像は、戦中・戦後の労苦を伝えるための貴重な資料となります。引き続き当館では、証言映像の収録を進めて参りますので、年齢、地域にかかわらず、戦傷病者とそのご家族でご協力頂ける方は、ぜひ当館までお知らせ下さい。

戦中・戦後の労苦を伝える 戦後世代の語り部育成事業

今年の一月一五日、「語り部」三期生の修了式が行われました。これにより平成二七年一〇月から開始された「語り部育成事業」は、足掛け五年にわたり一期生一〇名、二期生八名、三期生四名の計二二名の修了者を送り出すことができました。その間、コロナ禍で二期生は一年間、三期生は二年間、研修できずに延期することも度々ありましたが、リモートや個別指導での対応により、乗り切ることができました。これも研修生が「語り部」になる、という思いがあったからこそ、無事修了することができたのだと思います。

今後は「語り部」としての思いを、館内での定期講話会、団体見学での語り部講話、そして館外での派遣講話など、幅広い活動で伝えていただく予定です。



三期生の発表風景



修了式

友の会通信 第13号

向春の候、皆様におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

一昨年来のコロナ禍により、しょうけい館の活動も、様々な影響がありました。夏の企画展は、令和三年七月一四日〜九月一二日の間に実施され、昭和館および平和祈念展示資料館との合同展である地方展も、島根県で、一〇月二九日から十一月七日の間に実施されました。語り部育成事業第三期生の三名は、本年一月一五日に修了式を終え、今後、語り部として活動されます。ただ、語り部の定期講話会は、コロナ感染の拡大に伴い休止の状態が続いています。

しかしながら、このようなコロナ禍において、自宅や職場からでも、当館のことを知っていただけるように、企画展など展示の詳細な情報をホームページで発信するなど、これに対応する活動を進めてきました。皆さま、どうぞご活用ください。

戦後七七年となり、戦争の実体験を語る人が、ごく僅かになりました。それだけに、戦争で傷つき病に倒れた人々の苦労を語り継いでいく活動は、戦争のない平和な日本を維持し続けるためにも極めて重要なものであります。

当館におきましても感染症予防を徹底しつつ、戦傷病者とそのご家族の労苦が継承されるよう励んでまいり所存です。本年もより一層のご支援を賜りますよう職員一同、心よりお願い申し上げます。

令和四年二月

しょうけい館 館長 原 剛

来館者の声

◆貴重な資料を拝見できましたが、涙が自然と出てきて、当時の言葉では表現できない苦しみを少しでも肌で感じとれたように思います。
(四〇代女性)

◆話だけではわかっていても、感じる事のできない恐ろしさや、残酷さ、理不尽な現実がそのまま展示されており、このような、史料館が戦争の本当の愚かさに気づくために、必要だと思いました。
(一〇代男性)

◆短い時間の見学でしたが、とても強く心に残りました。野戦病院のジオラマは、暗いどうくつの中で麻酔も使われずに行われた手術の悲惨さに、とても怖くなりました。
(二〇代女性)

証言映像収録のお願い

証言映像は、戦中・戦後の労苦を伝えるための貴重な資料となります。引き続き当館では、証言映像の収録を進めて参りますので、年齢、地域にかかわらず、戦傷病者とそのご家族でご協力頂ける方は、ぜひ当館までお知らせ下さい。

「友の会通信」は毎年二回の発行を予定しております。

寒い日が続きますが、皆様におかれましてはくれぐれもお体にご自愛ください。



発行/しょうけい館
戦傷病者史料館
〒102-0074 東京都千代田区九段南 1-5-13
ツカキスクエア九段下
電話 03(3234)7821
FAX 03(3234)7826

春の企画展 予告

「残された言葉や声をたずねて」

会期 令和四年三月一五日(火)〜五月八日(日) 予定

戦傷病者は、戦中・戦後を通してさまざまな苦しみや辛さを抱えて生きてきました。彼らは、自身の体験を書籍や手記に綴ったり、映像で当時の思いを語ったりしました。その中には、印象的な言葉や声が残されており、戦中・戦後に体験した労苦が詰まっています。戦地での思いや、戦後も続く傷の痛み、これまでの人生を振り返った心境など、さまざまな場面に応じて発せられた言葉や声の数々。

戦傷病者の多くは亡くなって直接話を聞くことはできませんが、残された資料からその声や言葉に耳を傾けます。

【ある戦傷病者が残した言葉】

「転がってきた手榴弾を見て、ハッと思った瞬間、轟音と同時に天地が逆さになり暗闇の中に落ち込むような感覚に襲われた」



摘出弾片と受傷時に身に付けていた時計

地方展 開催報告

「ししょうけい館（戦傷病者史料館）―島根展―」

会期 令和三年一〇月二十九日（金）～十一月七日（日）

島根県の松江テルサにて、昭和館、平和祈念展示資料館と連携して展示会を開催しました。

今回の展示では、数名の戦傷病者に焦点を当て、各々が体験された戦中・戦後の労苦を、関連する資料とともに紹介しました。さらに、今年度は東京で二回目のパラリンピックが開催されましたので、一回目に開催された一九六四年のパラリンピックと出場した戦傷病者の活躍も合わせて紹介しました。

令和四年度は神奈川県にて、昭和館、平和祈念展示資料館と合同で展示会を開催する予定です。多くの方々にご来場いただけるよう準備を進めてまいります。

来場者の感想

◆ 具体的な一人一人の事が良く分かり、紹介された戦傷病者が身近に感じた。

◆ 一九六四年に出場したパラリンピックの選手の背景に戦争があったことが知れた。



出展資料



展示風景

ミニ展示

令和三年六月一五日から七月一日まで、ミニ展示「教育紙芝居にみる傷痍軍人」を開催しました。

今回展示した資料は、戦中に軍事援護を担当していた軍事保護院（及びその前身の傷兵保護院）の指導のもと製作された、傷痍軍人が登場する紙芝居「原っぱの子供達」と「雪晴れ」です。展示会場ではナレーションを入れた紙芝居の動画を上映し、鑑賞できるようにしました。



展示の様子

証言映像収録

今年度は、千葉県にて長く障害者福祉活動に携わってきた方の証言を収録しました。この方は千葉の高射砲部隊に配属され、部隊の移動先であった仙台で空襲に遭い、右足を切断しました。戦後は、地元の企業に復職して仕事に励みながら、地域の身体障害者福祉会の結成に尽力、その役員を歴任しました。日陰者とされてきた障害者に自立を促すとともに、社会の人々の意識を変えるため、様々な活動に人生を捧げました。



収録の様子

寄贈資料の保存・活用

いつも貴重な資料をご寄贈いただきまして、誠にありがとうございます。今回は、ご寄贈いただきました資料の保存方法と活用について、簡単にご紹介いたします。

（一）資料の保存から収蔵まで

まず、寄贈された状態を記録するために写真を撮影します。そして資料を確認し、大きさや素材に合わせて保存方法を決めていきます。資料によって保存方法は様々ですが、例えば証書などの紙資料は、一点ずつ中性紙の封筒へ入れていきます。チリ・ホコリが付着したり温湿度の変化で資料が傷んだりしないようにするためです。物の資料であれば薄葉紙と呼ばれる薄く柔らかな紙で包み、傷がつかないようにします。

このようにして保存作業を施した資料は、中性紙箱へまとめて入れていきます。最後に箱ごとに名前や番号を付けて、収蔵庫の棚で大切に保管しています。



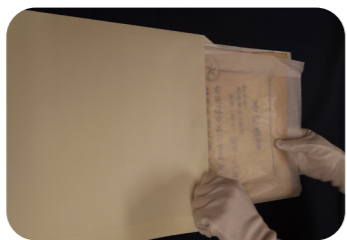
収蔵庫の様子



保存箱への収納



物資料の保存



紙資料の保存



写真撮影

また、資料は収蔵品を管理するシステムに登録し、データでの管理を行います。資料が使われていた年代、記載されている文字、材質、保存状態などの情報を入力します。また、撮影した資料の写真をシステムに登録します。寄贈資料を基にした資料のデータベースを作成し、必要な時にすぐに資料の情報を閲覧できるようにしています。

（二）資料の活用について

寄贈資料は、常設展示だけでなく春と夏に行われる企画展や、ミニ展示などでテーマに合わせて活用をしています。また、当館の一階には情報検索端末が設置されており、文献資料をはじめ、証言映像や戦傷病者の記録を検索することができます。ご寄贈いただいた資料は、先述のデータベース化作業によって、デジタル資料として来館者のみなさまにもご利用いただけます。



資料情報の入力



展示会での活用



情報検索端末

資料寄贈のお願い

戦傷病者の皆様に関する資料（写真、回想記、軍装品、摘出弾、義肢、受傷や恩給に関する文書等）、奥様やご家族に関する資料（日記、写真等）、傷痍軍人会、妻の会に関する資料（会旗、名簿等）をお持ちの方からのご連絡を待ちしております。資料は館で大切に保管し、継承事業に活用させていただきます。